



授業者に教わる授業から、生徒が学び取る授業へ

— 学びに向かう力の涵養を目指した

「第3章 日本の諸地域」の授業実践—

埼玉県 新座市立第五中学校 教諭 橋本 一秋

1 はじめに

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』p.39には「生徒一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要」とある。

この学びに向かう力、人間性等の資質・能力を育成するためには、社会科の授業観を「授業者に教わる授業」から「生徒が学び取る授業」へと転換する必要があると考え、授業改善に取り組んでいる。試行錯誤していくうちに、3つの理由で『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）第3部「第3章 日本の諸地域」が「生徒が学び取る授業」と親和性が高いことに気付いた。

1つ目は、本校社会科では「日本の諸地域」は2年生の2学期で学習するため、入学後の1年半を授業転換の準備にあてられるためである。例えば、生徒が学び取る授業をスモールステップで取り入れることで、そのよさを生徒自身が実感できるようにする。筆者が定期的に実施している、表1の社会科学習実態調査からは、生徒の意識面において、授業観の転換が進んでいることがわかる。2つ目は、本単元の学習内容そのものにある。日本をフィールドとしているため、生徒が自身の生活体験と結び付けやすい。教科書においても、九州地方から北海道地方までの7地方を同様の単元計画で学べるよう構成

表1 社会科学習実態調査（6学級242名対象）

質問：「社会科の学力を伸ばすために、あなたが効果的だと考える学習活動をア～キから選び、順位をつけてください。」	2021年 11月実施	2022年 11月実施
ア 先生の説明を聞く。	2位	5位
イ 教科書や参考書を読む。	1位	4位
ウ 動画を視聴する。	6位	6位
エ 問題解決の手本をみる。	7位	7位
オ 相談や議論をする。	5位	3位
カ 問題解決や調査に取り組む。	4位	2位
キ 学習した内容を説明する。	3位	1位

されているため、生徒自身が先を見通しながら、見方・考え方を意図的に働かせた問いを設定しやすく、自ら学習を回していくことができる。

3つ目は、勤務校でICT機器及び通信環境が整備されたことである。1人1台のChromebookと教育アプリGoogle Classroomやロイロノート・スクールの配布及び、全校生徒の一斉使用を可能にする通信環境の整備によって、配布・まとめ・提出・共有などの時間が大幅に短縮され、生徒の班学習に十分な時間を確保できるようになった^{*1}。

本稿では、この第3章から「第5節 関東地方」で実践した「生徒が学び取る授業」を紹介する。

2 実践事例（第5節 関東地方）

（1）単元計画

すべての地方は、表2のような5時間の単元計画で構成している。第1・2時で各地方の基礎的・基本的な特徴を大きくとらえ、第3・4時で課題の解決に向けて思考・判断し、第5時でまとめ地図に表現するという流れである。学

*1…なお、資料配布から地図の作成までのすべてをロイロノート上で行い、紙のノートは使用しない。

表2 関東地方の単元計画

時	主となる問い	主として扱う内容 (教科書ページ)
第1時	どこに何があるのだろうか	【1 関東地方の自然環境 (p.238・239)】、【5 臨海部から内陸部へ移りゆく工場 (p.246・247)】、【6 大都市周辺の農業と山間部の過疎問題 (p.248・249)】
第2時	なぜそこにあるのだろうか	
第3・4時	どのような地域なのだろうか	【2 多くの人々が集まる首都、東京 (p.240・241)】、【3 東京大都市圏の過密問題とその対策 (p.242・243)】、【4 人口の集中と第3次産業の発達 (p.244・245)】
第5時	どのような地域になるべきだろうか	関東地方の全ページ (p.235～252) に加え、地図帳、資料集等を自由に活用して、まとめの地図を作成、提出する。

習の導入とまとめでは、白地図を用いて主題図を作成させている。「どこに何があるのだろうか」という問いをはじめ、地理的な見方・考え方を働かせるには地図で表現することが最も有効だと考えているからである。また、「主となる問い」を統一し生徒と共有することで、学習が進むにつれて、今どのようなことに力を入れて学ぶべきか、生徒自身が判断できる。

(2) 第1時 どこに何があるのだろうか

導入で生徒は、図1のような関東地方のイメージイラストを5分で描き、自己のもつイメージを自覚する。その後、4人ひと組の社会科班で、関東地方の地形、気候、農業、工業の主題図をそれぞれ分担して図2のように作成する。この時は、同じ主題図を担当する生徒同士で集まって、相談しながら作成する。教科書の内容をバランスよくとらえられるよう、白地図とともに「指示書」も配布する。そこには「都道府県と県庁所在地を示しなさい」から「京浜工業地帯、京葉工業地域、北関東工業地域の広がりを示し、そのちがいを説明しなさい」まで具体的に明記しているが、学習が進むにつれて指示を減らし、第7節の北海道地方では「農業の特色について、〈どこに何があるのか〉を主題図にまとめなさい」としている。授業の後半では、関東地方の単元を貫く学習課題を生徒に考えさせ、右のように学級ごとに設定する。こ



図1 ロイロノートで共有した関東地方のイメージイラストのような地方なのかを大きくとらえさせるため、イラストの地色を地形(桃)、気候(黄)、第一次産業(緑)、第二次・第三次産業(青)と色分けしておく。関東地方は青を選択する生徒が多かった。



図2 関東地方の主題図の例(農業)

- 学級A：関東地方の人口集中の原因や、人口の集中が与える影響にはどのようなものがあるか。
- 学級B：関東地方の人口や都市が栄える魅力とはどのようなものか。
- 学級C：関東地方にはどのような特色があり、それに伴ってどのように人口が増加し、都市が発展してきたのだろうか。

の学習課題が第5時で作成するまとめ地図のテーマとなる。

(3) 第2時 なぜそこにあるのだろうか

分担した4つの主題図を社会科班で共有し、発表する。発表者にはロイロノート・スクールの画面を指し示し写真やグラフを活用しながら説明することを、聴く側には主題図や教科書にメモを取ることを求めている。こうして関東地方の「どこに何があるのか」を大きくとらえたうえで、「なぜそこにあるのか」を追究する学習

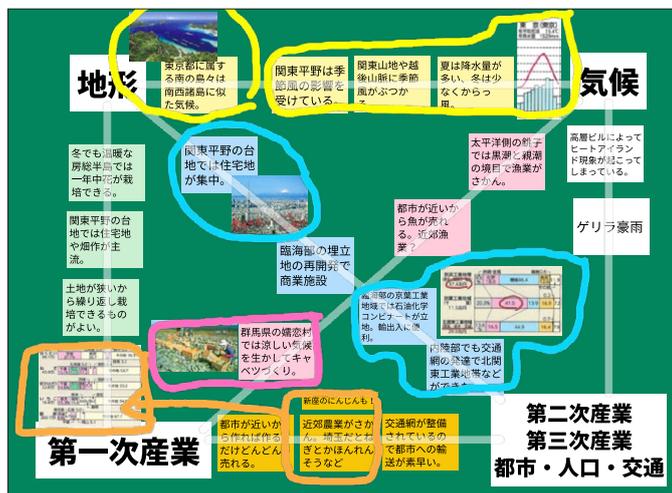


図3 関東地方の地形、気候、農業、工業を関連づけた図

活動へと展開していくために、ロイロノートで共同編集ができる共有ノート機能を使って、地形、気候、農業、工業の特色を関連づけていく(図3)。

関連づけでは主題図作成で獲得した知識を活用しながら進められるよう促す。例えば農業の主題図を担当した生徒が「関東地方といえば近郊農業です」と切り出し、地形担当が「都市向けの畑作は関東平野の台地を生かしているよ」と返し、気候担当が「房総半島南部は黒潮の影響による温暖な気候を生かして花の栽培がさかんだ」と続くような会話ができるとよい。また、「臨海部の京葉工業地域では石油化学コンビナートが立ち並んでいる」という文章を入力するだけではなく、写真やグラフなど根拠となる資料を提示することも促す。教師はロイロノートで各社会科班の進行状況を把握しながら適宜、評価と指導を進めていく。その後関連づけの図を隣の班に発表させ、教科書本文をバランスよくとらえられているか、資料に基づいているかなどを確認し合う機会を設ける。

(4) 第3・4時 どのような地域なのだろうか

教科書で各地方に設けられた視点から課題を追究していくのが、第3・4時である。「人口や都市・村落」に注目して「人口の集中を生かした産業の発達」と「過密への対策」を主たる学習内容としながら、「どのような地域なのだろうか」という問いを追究する。ここでは生徒の学習意欲を喚起するため、「世界の都市総合



図4 東京(大都市圏)の強みと弱みを座標に分類した図



図5 東京の強みと弱みを社会科班で共有(筆者撮影)

力ランキング」^{*2}を教材化した。2022年のランキングで、東京はロンドン、ニューヨークに次ぐ3位であった。生徒からは「なぜ3位に入れたのか」と「なぜ1・2位になれなかったのか」という声がある。そこで東京の強みと弱みを教科書等から調べて、議論しながら考える展開に導く。「2 多くの人々が集まる首都、東京」「3 東京大都市圏の過密問題とその対策」「4 人口の集中と第3次産業の発達」の3単元分を社会科班で分担して、図4のような座標に分類していく。

第4時は、分担して作成した座標軸を説明し合い共有する(図5)。ここでは「人口の集中」を多面的・多角的にとらえさせたい。つまり、「人口の集中」は東京の強みでもあり弱みでもあること、立場が変われば強みは弱みに、弱みは強みになることである。共有後、世界の都市総合力ランキングの6つの評価項目(「経済」「文化・交流」など)から強みと弱みをグループで議論し、まとめ、隣の班に発表する。ここでは聴く

*2... (https://www.mori-m-foundation.or.jp/ius/gpci/)

学習課題の答えについて、「どこに何があるのか」だけではなく、「なぜそこにあるのか」について、人口と都市・村落に注目しつつ、他地方とも比較しながら、「どのような地域なのか」「どのような地域になるべきだろうか」を明らかにした、地図表現に優れたまとめ地図を作成できている。

図6 関東地方のまとめ地図の評価基準 (A評価の場合)

令和4年度 第2学年社会科 (地理的分野) 学習活動振り返りカード
第5節 関東地方
人口や都市・村落に注目して
2年()組()番 氏名()

単元の学習課題と目標
関東地方について調べたいこと
なぜこのような地形の特色ができたのか
なぜこの地域に人が多いのか

日	月	日	本時の学習課題	本時の学習目標	本時でわかったこと	学習の振り返り
1	月	日	先を覚悟して、地理的な視点での「第5節 関東地方」の学習課題をたどろう	本時の学習目標を達成できたか	今まででできなかったことがあったら、どうすればよかったか、同じことを繰り返さないようにしたいことを決めることができるようになったらいいと思う	関東の地形の特色がわかった。また、人口が多い理由もわかった。また、人口が多い理由もわかった。また、人口が多い理由もわかった。

関東地方の学習課題
関東地方の人口集中の原因や、人口の集中が与える影響にはどのようなものがあるか。

4つの地理的的特色を関連付けよう

人口が集中する理由

関連付けのパターンもわかってきたので、しっかりと説明したり理解しやすくなるかをよく考えてやっていきたいと思う。

図7 振り返りカード (部分)

生徒の記述を概観しながら、「先を見通しながら、課題解決のために自ら学習を調整している姿」として評価する。

側に「同意する役割」と「批判する役割」を決めさせ、議論が活発になるよう促している。

(5) 第5時 どのような地域になるべきだろうか

第1時で学級ごとに設定した学習課題の答えを地図で表現する。あらかじめ図6のような評価基準を示し、指導と評価の一体化を図る。この評価基準は学習が進むにつれて少しずつ引き上げている。生徒たちは教科書を中心に、地図帳、資料集等を自由に活用し、ロイロノートでまとめ地図を作成・提出する。同時に「振り返りカード」も提出させ、これを主体的に学習に取り組む態度の評価材料の一つとしている(図7)。

まとめ地図は「思考・判断・表現」と共に、「主体的に学習に取り組む態度」における「粘り強さ」に関わる評価材料にもしている。同じ生徒が作成した九州地方と関東地方のまとめ地図を比較すると、九州地方では「どこに何があるのか」と「なぜそこにあるのか」の網羅で終わっていたが、関東地方では視点と課題に焦点化しながら「どのような地域なのか」「どのような地域になるべきだろうか」まで表現できている。資質・能力の向上を見ることが出来る(図8)※3。

※3…生徒にはAからCの評価をつけて返却するが、評価疲れに陥らないように授業者のコメントはつけず、授業内でAからCの典型的な事例を解説している。

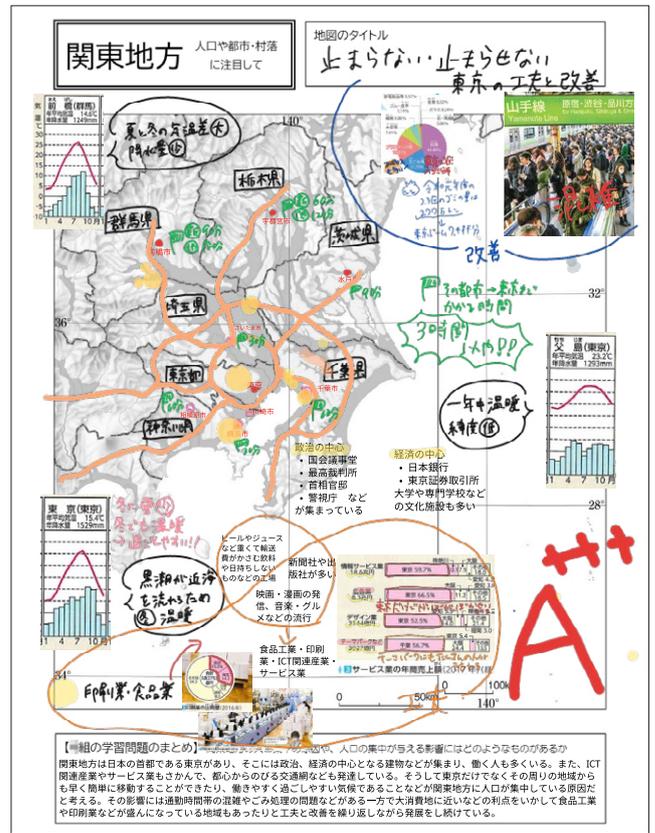


図8 学級Aの生徒が作成したまとめ地図 (A評価の場合)
(図2・8白地図:教育出版ホームページ)

3 おわりに

本単元で授業者が話す時間は1時間の授業あたり10分もない。このため、社会科学習実態調査の回答には、講義型の授業に慣れ親しんだ生徒たちから知識・技能の習得への不安や定期テストの準備に戸惑う記述が散見されたことも事実として受け止めたい。

一方で定期テストにおいては、九州地方で50%に届かなかった正答率は、中国・四国地方と近畿地方では60%を超えている。この変化をもって、授業改善によって非認知能力(学びに向かう力、人間性等)と認知能力(知識及び技能や思考力・判断力・表現力等)が互いに影響を及ぼし合いながら向上している根拠とするのは早計だが、1年次より、こうした「生徒が学び取る授業」を継続してきたことで、生徒は自ら調べ、根拠を示しながら考察・表現する力を着実に身に付けてきたと実感している。今後も生徒と共に「生徒が学び取る授業」への転換を継続しようと思う。引き続き試行錯誤を重ねていきたい。